

Title	「職人歌合」の詠風：『七十一番職人歌合』の場合
Author(s)	岩崎, 佳枝
Citation	詞林. 2 P.40-P.51
Issue Date	1987-11-23
Text Version	publisher
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/67244">https://doi.org/10.18910/67244</a>
DOI	10.18910/67244
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

## 「職人歌合」の詠風

—『七十一番職人歌合』の場合—

『七十一番職人歌合』は、明応三年（四九四）成立の『三十二番職人歌合』（注1）の後、約六年後の明応九年（五〇〇）に制作された（注2）中世最後の最大の「職人歌合」である。登場する職人（詠者）も百四十二人へのぼり、二百八十四首の詠歌が収められている。勿論『東北院職人歌合』『鶴岡放生会職人歌合』『三十二番職人歌合』（注3）同様に、詠者は上層貴族たちであり、職人に詠者を仮託した代詠の歌合である。『七十一番職人歌合』にも当時の公卿歌人・飛鳥井雅康の詠歌二十四首が含まれている（注4）。『三十二番職人歌合』の詠者の一人である三条西実隆も、恐らく当歌合の詠作者の一員であり、画詞も彼の手に成るものと推測される。

職人歌は貴族たちの詠である。彼らが職人になった思いで職人たちの生活や心情を歌に詠み込む。詠歌には当然ながら職人

岩崎佳枝

語（主として職種名や道具名・製品名）が挿入されている。俗の世界を俗の語で詠むわけである。しかし与えられた歌題は、貴族たちが好むところの「月」であり、「恋」である。即ち「月」「恋」は主として雅の世界で扱われるテーマである。左右に分かれた詠者たちは、俗なる職人（注5）に対して月・恋という、一見矛盾する歌題のもとに歌を競い合わねばならない。俗の世界をいかに雅の素材で彩るかが、彼らの腕の見せ所となる。「いやし」を「やさし」で包み込むわけである。

では『七十一番職人歌合』の場合、具体的にはいかなる技法が用いられているのであろうか。一般的には、職人語や職人の生活・心情をあらわすいわゆる俗なる語句を、雅び・やさしを引き出すための序詞として用いる、つまり上句にそれを置き、下句の月や恋への思いに移らせる方法である。留意すべきは、逆に下句に職人句を置くと、雅びの世界を奏でる効果は半減する。『七十一番職人歌合』の殆どは前者の技法が採られている。技法は大きく次の三種に分けられる。

A 上句の三句目を「細帯の」「始の」「立君の」など、主として体言に格助詞「の」を付けて下句へ続ける。

B 上句の三句目を「太郎鎌」「筑紫針」「鏡磨」など主として体言止めにして下句へ続ける。

C その他

1 イ上句の三句目が「すみかねに」「身の業を」「下枝より」など、主として体言に格助詞「に」「を」「より」が付く。

ロ上句の三句目が「きりかねて」「やみまたば」「いかにして」など、主として用言または助動詞に接続助詞「て」「ば」「して」「が」がつく。

ハ上句の三句目が「もんぜむは」「紙までも」など主として係助詞「は」「も」が付く。

2 上句の三句目が「けり」「なり」などの助動詞や、「かな」「や」「ばや」などの終助詞で切る三句切れ。

3 上句の三句目が用言の終止形や副詞で終わるもの。

『七十一番職人歌合』全歌二百八十四首には、体言に「の」を付して下句へ続けるAが八十五例、三句目を体言止めとするBが八十四例に達し、全体の約三分の二を占めている。しかも、一・二の例外を除き、上句の最後（三句目）には必ず職人語が配されている。歌集や歌合集において、全歌の約三分の二近くをA・Bの技法によって占められるという例は他に見あたらず、これは「職人歌合」、とくに『七十一番職人歌合』のもっとも

大きな特徴の一つと言えよう。

A八十五例のうち若干首を挙げよう。（引用歌は群書類従版本による）

・我袖のひるよもしらぬなまかべのよりそふ人のなきもうらめし  
（壁塗 二・恋）

・我恋はくさびもさゝぬ小車のめぐり逢べきたのみだになし  
（車作 五・恋）

・筆つかにきりつゝめたるさゝ竹の永夜しらず月をみる哉  
（筆結 八・月）

・一たきのさも燃えやすき小原木のあかしもははず入かたの月  
（小原女 九・月）

・馬かはふばくらう時の立君の宵曉にかよひなればや  
（馬買 一〇・恋）

・人妻にかけし衣の細帯のくけぢもあらば嬉しからまし  
（帯売 一四・恋）

・たのまめや人をば独ふせづるのきれぬ契とおもはましかば  
（弦売 一六・恋）

・あしざまに取落しつるかはらけのわれてくだけて物おもふ哉  
（土器作 一七・恋）

・忘らるゝ我身よいかにならがみの薄き契はむすばざりしを  
（紙漉 一九・恋）

・いかけ地のところところのきり金の光ことなる秋の夜の月  
（蔭絵師 二七・月）

次にB八四例のうち若干首を挙げる。

・軒あれて古きかぢやの太師櫃ふりさけみれば月のさやけさ

(番匠 一・月)

・逢ことはそれぞとぢめの桜かばばかりとこそ思はざりし

(繪物師 五・恋)

・なにしおへば秋のうちにも播磨鍋ふたゝびにるゝ月をみる

(鍋売 六・月)

・我恋は忍ぶとすれどさか櫃子口こそつゝめ色に出つゝ

(酒作 六・恋)

・打絶えていとめまばらのあら薙いのねらるべき月の影かは

(薙打 八・恋)

・骨こはき扇の紙の薄そくい思ひもつかぬ人に恋つゝ

(扇売 一二・恋)

・山風の落くる露の古あしだかたはの月は木のま成けり

(足駄作 二二・月)

・いつしかに我にみえじとかくれがささしもへだてぬ心なり

(傘張 二二・恋)

・出やらでいと心を筑紫櫛はわけの月に山風もがな

(櫛挽 四二・月)

・独ふすたゝみのうちのかくし針人にしられぬ恋もするかな

(疊刺 四三・恋)

・我恋は心一つにしのぶ綿つみしらすすべき便なければ

(綿売 五九・恋)

右の歌にも見られるように、A群に「生壁」「小車」「笹竹」

「小原木」「立君」「細帯」「布施弦」「切金」「土器」「奈良紙」、B群には「太郎槌」「桜樺」「播磨鍋」「酒瓶子」

「荒蕙」「薄統飯」「古足駄」「隠傘」「筑紫櫛」「隠針」「信

夫綿」など、上句三句目には必ず職人用語が置かれている。前

述のようにこの技法は、上句で職人に關する事象(生活・心情)

を詠み、それらが下句の雅び・やさしさを呼び起す序詞的役割

を果たすものといえる。

次にその他の技法としてCの例を挙げよう。このグループは、

とくに三句目に職人用語を詠み込むということもなく、体言な

どの下に格助詞・接統助詞・係助詞・終助詞が付くなど詠法は

さまざまである。

1イの例

・をしなをす工もいさやすみかねにさげすむ月のかたぶきに

けり (番匠 一・月)

・うらめしや筑摩のなべの遠ことを我にはなどかかさねざる

らん (鍋売 六・恋)

・後しろし家の紅葉の下枝より色とりいつる夜半の月影

口の例 (絵師 二八・月)

口

・しかま川逢瀬もいつとちぎらぬにあなたがち人の恋しかるら

ん (紺搔 四・恋)

・いけはぎの皮かはふ時ながむればあかはだかにもすめる月

哉

(皮頁 一〇・月)

・秋さむきねやの扇の風絶て雲の折めの月ぞかくるゝ

(扇売 一三・月)

・恋といふ一もじゆへにいかにしてかきやる文のかず尽すらむ

(葱売 四〇・恋)

・山国のゑせ木のくれはかさなれどきはるゝみは独こそおれ

(筏士 四二・恋)

ハの例

・恋しさの心ものべぬ独寝は九条むしろもせばからぬかな

(筆結 八・恋)

・すきかへし薄墨染の夕暮もしら紙色に月ぞいでぬる

(紙漉 一九・月)

・独ねの身をもはなたでぬきれこそ我手枕のふしとなりけれ

(念珠挽 三二・恋)

2の例

・引きはへて永き夜ながらながめばや影も白木の弓張の月

(弓造 一六・月)

・水かねやざくろのすます影なれや鏡とみゆる月のおもては

(鏡磨 三三・月)

・心さへ人のけはひにみゆる哉さにづらべにの移りやすきは

(紅粉解 三三・恋)

・眠らねばきやう尺までも無りけりさやけき月を伴道にして

(禪宗 六四・月)

・蓮葉のにごらぬ露にやどるなりはも上品上生の月

(念仏宗 六五・月)

3の例

・さしも我ちぎり置しを今宵又誰とぬものゝいとも恨めし

(縫物師 五一・恋)

・我ながらをよばぬ恋としりながら思よりける心ぶとさよ

(心太完 七一・恋)

・今は我きればてぬるをさても猶ろくろの縄のひく心かな

(轆轤師 二〇・恋)

『七十一番職人歌合』二八四首中の約三分の二を占めるA及びBの技法は、各番いごとにはほぼ平均に散在(一番い四首中約三首)している。それに対し、Cは六一番から六九番(六六番連歌師・早歌唄の二職人歌を除く)までの三二首に圧倒的に多い。A・Bがもっとも少ないこの番いの詠者は宗教者(山伏・持者、祢宜・巫、競馬組・相撲取、禪宗・律家、念仏宗・法花宗、比丘尼・尼衆、山法師・奈良法師、華嚴宗・俱舍宗)で占められている。因みに六一番・六二番・六四番・六五番には、一番い四首中三首がC、六七番・六八番・六九番に至っては、一番いすべてCとなる。理由としては、「職人歌合」とはいえ、これら宗教者群の詠歌には伝統的な釈教歌の要素が含まれているからではないか。勅撰和歌集の部立にも釈教歌がある。この小群は職人の立場に立っての代詠歌ではなく、実際に僧籍にあった歌人たちの詠歌とも考えられる。

また『七十一番職人歌合』の詠歌の中には、当時の職人たちが商いの際、店頭や路上での呼び声（職種名・商品名でもある）が挿入されているものもある。

・秋のよも限有けり馬かはふ声すむほどの明方の月

（馬買 一〇・月）

・朝かへる道行ぶりのかはかはふ我逢つると人にかたるな

（皮買 一〇・恋）

・昼なれやよはの月ともいかにゆわうはよきの塵も曇なき哉

（硫磺等売 二一・月）

・暮ごにざうりやめすといひなして人のあたりに立ならず

（草履売 二一・恋）

・月のきる雲の衣をうり物やさふらふといふ人もかはめや

（牙脛 四一・月）

・思ふこと人に伝ふる道ならでおようや有といふはよしなし

（牙脛 四一・恋）

・いつまでか待宵ごとの口つけにあすやあすやといふをたの

まむ （酢造 七一・恋）

右の詠歌には、「馬かはふ」「皮買はふ」「いかゞ、硫磺等」

「売り物や候」「御用や有」「草履や召す」「あ酢や、あ酢や」

など、職種名や商品名を一首に織り込み、しかも巧みに月や恋

を詠い、雅の世界を表出させている。当「職人歌合」の大きな

特徴の一つである。

## 二

以上、『七十一番職人歌合』の詠歌の特徴と思われるものを述べた。では判詞において、当歌合の判者はいかなる態度で判をなしたであろうか。判者の目、評価の基準等に焦点を当ててみたい。

『七十一番職人歌合』に詠まれている歌には、職人語が用いられているために庶民臭を帯び、一見、狂歌的色彩を呈しているかに見える。しかし詠風の分析からも窺えるように、この歌合は『東北院職人歌合』『鶴岡放生会職人歌合』同様に、雅の文学を意図したことは明らかである。同様に判者たちも「職人歌合」として特別視せず、あくまで伝統的和歌を批評する目で判をなしている。

まず『東北院職人歌合』『十二番本』では、判者は心・詞ともに正統的な「和歌の道」に従うべきであることを述べ、「俳諧の歌」の姿を嫌い、従来の歌合の作法に遵すべきことを説いている。

（十二番本）

・心詞、艶にしてよくよく和歌の道をしれり。

（盲目 五番・月）

・心詞、艶にして歌の姿をかねたり。

（廷打 七番・恋）

・俳諧の歌の姿にて当世の風情にあらず。

(桂女 十一番・恋)

なお番匠の歌(十二番本・三番、五番本・二番)においても、  
伝統的歌唱論(歌論)にもとづいて傾く月を詠むことを難とし  
ている。

すみかねのなほりをたまたすみなれどもかたぶく月にかふば  
りぞなき (番匠・月)

(判)

・かたぶく月とよまれたるこそふかき難にて侍れ。月を題に  
えてはさかりによみべき也。 (十二番本)

・かたぶく月とよまれたるいかゞ侍覽。月の歌をばさかりに  
よむべきとぞふるき歌合(注6)にも申たる。 (五番本)

『鶴岡放生会歌合』の詠者は、「楽人」「舞人」「宿曜師」  
「算道」「絵師」「綾織」など鶴岡八幡宮に関連深い職人たち  
であることから、自ら雅味を帯びる。また「遊君」「相人」  
「樵人」「筆生」「漁父」とするなど漢名を使用している。こ

の傾向は本文中にも見られ、判詞もおおむね漢文調で、句形  
式が散見されるのもこの歌合の特徴の一つである(注7)。

くろかみをやみのうつゝにすぎやりて見ぬ面影をうつしか  
ねつゝ (絵師 五番・恋)

こよびさへいもがごまくらよそにしておほとゝのゐにやひと  
りあかさん (綾織 五番・恋)

〈判詞〉

・左、やみのうつゝは優に侍べし。右はつくろはぬ様にきこ

えて歌めきたる事なければ、猶左の勝ちにこそ。

『七十一番職人歌合』の場合はどうであろうか。やはり判者  
は詠風が雅を基調とすることに注目し、「こはきことば」「強  
詞(、)」「ただことば」「徒詞(、)」「いやし」「卑(を嫌ひ、反  
対に「やさし」「優」「艶」「寄せ」ある「典拠」のあるを良  
しとする。

「こはきことば」について言えば、次の詠歌A・B・C・D

・Eに対し、

A 骨こはき扇の紙の薄そくい思ひもつかぬ人に恋つゝ  
(扇売 一三・恋)

B 我恋は建仁寺なるさうめむの心ぶとくもおもひよるかな  
(素麵売 三七・恋)

C 逢事は猶かたければ覗いし金剛しやうもかなはざりけり  
(硯士 三九・恋)

D をしはかるこあてだになし夜引目のいる方暗き月のあた  
りは (弓取 四七・月)

E 逢事のじゆくせぬ柿のさねかはごしぶしぶにだに人のこ  
ぬかな (皮籠造 五三・恋)

判者は、

a 道理は立て聞ゆれど五文字誠にこはく侍り…。 (負)

b 第二の句こはし。 (負)

c ことよりは能聞えたれども第四の句あまりにこはくきこ  
ゆ。 (負)

d 詞こはし。げにもつよき弓とりのわざなり。されど月の

歌に、いるかたは心なきに似たり。

(負)

e 熟といふ詞こはけれど、柿のさね、かはこ、熟しなど縁

の言葉にや。

(負)

と述べる。即ち、「骨こはき」「建仁寺」「金剛しやう」などの詞は強し故、判定は負となる。また次の詠歌に對し、

a 夕暮の山端みればまつさかやつるつるとこそ月はいでけ

れ

(弦壳 一六・月)

b 玉札もはねのけらるゝ荒弓のをしかへしても人ぞ恋しき

(弓造 一六・恋)

c 秋うるしぬる夜はいかにわれひきればけめは白き村雲の

月

(挽入壳 一七・月)

d 恋しぬときくきくなをもさまでやと我をへしきに人のい

ふなる

(組師 五一・恋)

e 秋霧は月すむ山のうちこしも雨のたぐひにきらふとぞみ

る

(連歌師 六六・月)

判者は、

a まつさかやつるとは続きたれど、つるつるの詞たゞ詞也。

b はねのけらるゝといふ、又たゞことばなり。

c さることゝは聞ゆるを、はけめと云や、たゞ詞ならん。

d 絶まといふべきを、ひきれに引れていへるにや。(負)

e 詞にへしきといふはたゞ言葉也。されどよくよせれば

猶為持。

e 霧は降物に打越を嫌、新式の心、可然は侍れど、山の打

越只詞にや。

(持)

と言ひ、「つるつる」「はねのけらるゝ」「はけめ」「へしき」

「山のうちこし」の語を「ただことば」であるとして、これらの詠歌に負の判定をしている。「いやし」に對しても同様で、

次の歌に對し、

A かつら鮎とりてうるかとやみまたば月の価はなく成ぬべ

し

(魚壳 一五・月)

B いかにしてさのみたつ名を大鼓かしらうつまで恋しかる

らん

(女盲 二五・恋)

C 毛がはりをとりあはせたる鞠かはの思もあはぬ人に恋つ

ゝ

(沓造 二九・恋)

D はいらふのたらざりけるか我に人ころばされしとおもひ

あはねば

(銀細工 三一・恋)

恋すとして青みはてたるひたちかねいつ色よしと人にみえ

まし

(薄打 三一・恋)

判者は、

a あたひといふ詞、歌にも侍らめど何とやらん賤しくきこ

ゆ。

(負)

b 大つゝみにかしらうつといふこと侍にや、されどいやし

く聞ゆればまけ侍べし。

(負)

c 当道さることも侍らめども、歌がらいやし。

(負)



d 左右ともに歌さまいやし。

と、歌柄・歌さまの「卑し」「賤し」を排除する。逆に職人用語を詠み込みながらも、「優」「艶」なる歌

A 秋さむき深山の里にたくほだの永き夜尽ぬ月影も哉

(山人 一一・月)

B 昼なれやよはの月ともいかゞゆわうはゞきの塵も曇なき

哉 (硫磺筆売 二一・月)

C 月に寝ぬとうじみ売の身の業を誰聞しらぬいびぎとかい

ふ (燈心売 四〇・月)

D いつまでか待宵ごとの口づけにあすやあすやといふをたのまむ (心太売 七一・恋)

に対し判者は、

a ほだのながくつきぬに月を思よせたる、いうに聞ゆ。

(持)

b ひるなれやとて、よはともいかゞゆわう等の塵も曇らぬなど、長々と言下せる。優ならざるにあらず、同科にや。

(持)

c 心詞能調ふりてへ略く此燈心によく引出られて艶に聞え侍。

d 酔つくる人は、あすやあすやといひて祝ごとにするとい

へるをよめるにや。えんにきこゆ。(持)

と評する。そして「やさし」を基調とするもの、「よせある」

(注8) 歌を勝ちとする。

A 故郷の壁のくづれの月影はぬるよなくてぞみるべかりける (壁塗 二・月)

B たつる茶のあはれ消とも逢ごとの一せにかふる命ならばや (一服一銭 二四・恋)

C くらきよに冠のえいやとられけん人にしられぬ我思かな (冠師 二八・恋)

D 線かへし悔しき物を片思おもひの玉の数かぎりなく (玉磨 三九・恋)

E 夕まぐれ山かた近き三日月のまがりながらに人ぬべきかな (鞍細工 四五・月)

F よそえてもげにぞ恋しき人まねのおほひかづらの女すがたを (田楽 五〇・恋)

恋られてむくひやするとゑめい冠者うつくしげなる人とみえはや (猿楽 五〇・恋)

G 夕まどひする人もなしかなうすの月の夜声のかしがましさに (葦物売 六〇・月)

H 吹たてし河よりをちの笛の音のゆかしとせめて聞人もがな (楽人 七〇・恋)

袖ふらば涙やみえんから人の立まふこともいかゞとぞ思ふ (舞人 七〇・恋)

これらの歌に対して判詞は、

a 壁の崩といひてぬるよなく月をみるいとやさし。(勝)

b 一銭をひとせにとなすらへたる、いとやさしくきこゆ。

c 故事を思てしかもその心あり、いとやさし。(勝)

d 左は首尾やさしくよめり。(勝)

e 右はことばつゞきやさし。(勝)

f 左右ともに我道のすがたをかりて恋をよせたるころばせやさし。(持)

g 月の夜ごゑによそへられてやさしく聞ゆ。(勝)

h 左右ともに、かにはふ宮の宇治を思よせ、光君のそで打振し事になずらへておもひの色にいへり。ともにやさしく聞ゆ。(持)

という。

「寄せ」ある歌には、

A 池水の月影みればしろばくの泥になりても光やはけつ(薄打 三一・月)

B 月見つゝいたづらぶしのなきまゝによの程造る竹かはこ哉(皮籠造 五三・月)

とあり、判詞に、

a 始中終、よくかなへり。でいにけつなど尤よせあり。(勝)

b ふし、よなど竹かはこによせあり。すこしまさるべくや。(勝)

(他一〇・五七・六九)(注9)

とある。

また、『七十一番職人歌合』には、典拠があると思われる歌も多い。判定において伝統的立場を重んじる判者は、勿論これらの歌を勝ちとする。例えば次のA・B・Cの歌の判詞に指摘されるように、「蛤売」の歌は、新古今和歌集秋歌上四〇〇「忘れじなにはの秋の夜はの空ごと浦に住む月はみるとも」を踏まえる。また「翠簾屋」の歌は、『白氏文集』卷一六(注10)や『枕草子』二九九段(注10)に、豆腐売りの歌は、光源氏を想定していよう。

A こと浦の月もなにわの蛤の貝ひろふまでえやはすみける(蛤売 一五・月)

本歌にすがりてしかも月を賞めたる…。(勝)

B 雪とみて巻あぐるかな玉すだれいとさやかなる秋の夜の月(翠簾屋 二三・月)

かの雪の朝の簾を月に引きかけてよむ。(勝)

C 恋すれば苦しかりけりうちどうふまめ人の名をいかでとらまし(豆腐売 三七・月)

かの源氏の夕霧の大将はまことしきによりてまめ人の大将といへり。(勝)

D 月にねぬとうじみ売の身の業を誰聞しらぬいびぎとかいふ(燈心売 四〇・月)

心詞能調ふりて、殊に源氏物語權の巻にや、程もなくいびぎとか聞しらぬ音すればといへる詞も…。(勝)

E 名にしおはゞ我こそはみめ笠縫のうら淋しかる秋の夜の

月 (笠鐘 四四・月)

まことに作者の名におふ浦の月より所あるか。(勝)

F 住吉の入江の月や故郷の姑蘇城外のあきのおもかけ

(暮露 四六・月)

：他人のをよばざる風体、かの仲麿が三笠の山の月に

も澄増りてこそ待らぬ。(注11) (勝)

G いとふなよかよふ心のむまじり人の聞べきあの音もなし

(暮露 四六・恋)

あの音せずゆかん駒もがといへる万葉の古風もよき

なして神妙に侍り。(注12)

(勝)

H 月にだに勸学院のもんぜむは立入道の人ぞ稀なる

(文者 四七・月)

文選を門前によせたるも：おもしろく聞ゆ。(勝)

I くせ舞の月にはつらき小倉山その名かくれぬ秋のものなか

(曲舞々 四八・月)

当世曲舞に、月にはつらき小倉山、その名はかくれざ

るけりといふ音頭を思よせたるにや。(勝)

J 車にて袖打ふりしまひ女かゝる恋すと人はしりきや

(曲舞々 四八・恋)

袖うち振しといひて、しりきやといひとちめたるは彼

光源氏のうたを思へる歟。(注13)

K 往來のさはりもぞする先人をくわん音せいし來迎も哉

(念仏宗 六五・恋)

一目みてわすられざりしおもかけは十羅刹女もかくやとぞ思ふ (法花宗 六五・恋)

ともに観音勢至を使とし、十羅せつ女を思懸たり。且恐なきにあらず。光源氏の物語にも、法けだちくすしからむと申めり。(注14)

L 諸共に月にうたはんげにやさば今はた誰もさぞ覺たる

(早歌唄 六六・月)

げにや娑婆の秘曲、其興侍：。(持)

M 人がたの月にまはばや陸王の日影をかへすばちの手づか

ひ 入日に月を准らへ、ばちにて招くこと、かの宇治の宮

のこと思よせたるにや。(勝)

N 吹たてし河よりをちの笛の音のゆかしとせめて聞人もが

な (楽人 七〇・恋)

袖ふらば涙やみえんから人の立まふこともいかゞとぞ思

ふ (楽人 七〇・恋)

左右ともにかのにほふの宮の宇治を思よせ、光君のそ

で打振し事にならずらへて、おもひの色をいへり。(持)

最後に、伝統的な情緒を重んじ、戯れ歌なるものを排除する

判者の態度を知るのに便宜な歌を挙げておこう。一つは四五番

の「鞆巻切」と「鞍細工」の月と恋の歌である。

・浮雲の晴もやらねばさや巻の引こみがちにみゆる月哉

(左・月)

・夕まぐれ山かた近き三日月のまがりながらに入ぬべきかな

(右・月)

左は、いさゝかざれ歌に似たり。右は、ことばつゞきや  
さし。可為勝。

・我恋はまちさや巻のやれすのこぬる人のこぬ身をいかにせ  
ん

(左・恋)

・いかにしてまづ人ぐちに乗ぬらんしらほね鞍のぬるよなき  
身に

(右・恋)

左右、たくみにして歌さま猶狂歌なり。ともにうるしほ  
しげなり。可為持歎。

月の歌では、左をいささか戯れ歌であるとする。「さや巻の  
引こみがちに」に見える月としたところが戯歌的であるという  
のであろう。それに対し右の「夕まぐれ山かた近き三日月」と  
の歌い出しを言葉続きがやさしとして勝ちとし、恋の歌は狂歌  
の歌さまであると批評する。「我恋はまちさや巻のやれすのこ」  
「いかにしてまづ人ぐちに乗ぬらん」など、確かに狂歌的であ  
る。「うるしほしげなり」とは、修正が必要そうに見えるとい  
う意である。「鞘巻切」と「鞍細工」がともに漆を用いる細工  
師であることによる冗談である。ともあれ、判者たちはこの番  
いからも、戯歌・狂歌的なるものを「職人歌合」に庶幾してい  
なかつたことが知られよう。

六番は「鍋売」と「酒作」である。恋の歌とその判詞は、

・うらめしや筑摩のなべの逢ことを我にはなとかかさねざる

らん

(左・恋)

・我恋は忍ぶとすれどさか瓶子口こそつゞめ色に出つゝ

(右・恋)

左歌、誠に撰集などに入たりとも恥すや侍らん。右は、  
いさゝかたはぶれ歌なり。仍左可勝。

とある。「鍋売」の歌は、撰集などに入っても恥かしくないと  
いう。「酒作」の歌は戯れ歌故、当然鍋売の歌を勝ちとする。  
このように判者たちは、戯歌・狂歌的なるものを敢て採択せず、  
勅撰和歌集入集にも価する歌を良しとしている。

「職人歌合」とくに『七十一番職人歌合』は戯れ歌であり、  
狂歌に属すると考えられているかも知れない。詠者の中には戯  
歌的意識をもつ者もいたであろうが、しかしそれはごく僅かで、  
殊に判者にあつては完全に伝統的な正統和歌であるべきだとの  
考えをもっていたのである。上句の最後に職種名や職品名など  
を盛り込み、縁語・懸詞を駆使して下句へ続かせ、全体として  
は「雅」の意識を忘れてはいない。しかも職人歌合の生活・心  
情を鮮かに詠いあげ、彼らの生の世界を生き生きと蘇らせてく  
れるのである。『七十一番職人歌合』は中世後期の歌壇を彩ど  
る異色の歌合の一つといえよう。

注1拙著『職人歌合の研究』——『三十二番職人歌合絵』の成

立と背景 — (歌合絵研究会 昭五六・三)

注2拙稿『七十一番職人歌合』成立年時考(『文学・語学』第

九六号 昭五八・一)

注3山本唯一氏稿『鶴岡放生会職人歌合』成立年時攷(『文芸

論叢』第十七号 昭五六・九) 拙稿「職人歌合」の詠者

たち — 『三十二番職人歌合』の場合 — (『語文』第四

一輯 昭五八・五)

注4拙稿「職人歌合」と飛鳥井雅康 — 『七十一番職人歌合』

の一詠者(『文学・語学』第一〇六号 昭六〇・七)

注5例えば「職人歌合」には次のようにある。

東北院の念仏に九重の人人男女たかきもいやしきもこそ  
り侍しに(『東北院』序文)

我等三十余人、いやしき身なじきものから(『三十

一番』序文)

かづら掬といへば、賤きやうなれど…(『三十二番』二

一)

いやしきあまのすさみにも…(『三十二番』二二)

注6大治三年(二二六)『永縁奈良房歌合』参照

注7例えば『鶴岡放生会職人歌合』序文には、「南にのぞめば

海浜茫茫たり。秦甸の一千余里思やられ、北にかへり見れ

ば社檀重々として、漢家の三十六宮にことならず」とある。

注8『八雲口伝』「歌にはよせあるがよき事」参照。

注9一〇番「むまかはふ」の恋歌(馬かはふばくらう時の立君

の宵曉にかよひなればや)の判詞に「身におふ恋とおぼえ

て立君に寄たり、心あるにゝたり」 六九番「華嚴宗」の

恋歌(思ふ人あはれ茶ずきに成りたらば摘しらすべき時も

あらまし)の判詞に「恋に茶のよせを求侍ること、才学少

し」

注10『白氏文集』卷一六「日高睡足猶慵起 小閣重衾不怕寒

蓮愛寺鐘歇枕聽 香炉峰雪撥簾看」『枕草子』二二九段「

雪のいと高う降りたるを、例ならず御格子まゐりて、炭櫃

に火おこして、物語などして集りさぶらふに、「少納言よ、

香爐客の雪いかならん」と仰せらるれば、御格子あげさせ

て、御簾を高くあげたれば、わらはせ給ふ」

注11『古今集』四〇六「もろこしにて月を見てよみける あま

の原ふりさけみればかすがなるみかさの山にいでし月かも」

(安倍仲麿)

注12『万葉集』三三八七「足の音せず行かむ駒もが葛飾の真間

の継橋やまず通はむ」

注13『源氏物語』紅葉賀「物思ふに立ち舞ふべくも非ぬ身の袖

打振りし心知りきや」(物語歌集八四四)

注14『源氏物語』帚木「吉祥天女を思ひかけむとすれば、ほう

けづき、くすしからむこそ、又わびしかりぬべけれ」

(本学研究生)